

凛々しいまち大阪の実現！ ～為すべきことを為し、 共に新たな歴史を刻もう～ 全ては未来のために



第61代 理事長
池田 太八
Tahachi Ikeda

はじめに

遥かこの国の外から見れば、今のこのまちはどのように見えるのだろうか。

この2011年を生きた私たちは、未来でどのように見えるのだろうか。

残された時間、未来のために、現在（いま）私たちに何ができるのだろうか。

私たちは誰であろうと、歴史という時間の流れと、世界という空間の中で生きています。故に過去であろうと未来であろうと、近くであろうと遠くであろうと、全ての出来事は必ず自分自身と関わり合いがあり、それぞれが多くの役割を担っていて、あらゆる事象の当事者であることを忘れてはなりません。また、私たちには、どのような境遇に置かれようとも、全て過去から受けたバトンを、これからの世界のニーズを的確に捉えて形とし、次の時代が少しでもより良く永続的なものにしていくために、各々の持てる力を合わせて、現実の問題に立ち向かわなければならぬ「為すべきこと」があります。現代のこの国やこのまちは、情報やインフラの急速な発展のおかげで、事実や背景を迅速且つ大量に知ることができるようになり、物財的な豊かさを簡単に得ることができるようになりました。その一方で多くの人が、有益な情報の取捨選択が困難となり、大衆の安直な感情を誤認したり、長期的な展望を考えず己の意志なく風評に流されたり、目先の利己的な行動に走る傾向にあります。しかし、より良い明日を創るには、氾濫する情報の中で世間の感情的な雰囲気流されず、先人の経験則を踏まえて時代に合わせ、多様な個性を融合させて、大胆に、そして毅然と新たな形を創ろうとする凛々しい姿が必要なのです。私たちは、ただ単にそんな時代を嘆き憂うだけではなく、期待感溢れる永続的な未来のために為すべきことを為し、あらゆる事象に対して扇情的な情報に左右されず、事実に従って互いに共生意識を持って新しい流れを創り出す「凛々しいまち大阪」の創造をめざします。

「凛々しい民」が新たな歴史を創る

歴史は必ず民の意志によって動き、長い目で見れば、それは必ず民にとってより良い方向へと進んでいきます。事実、歴史上においても、先の大戦後のアジアやアフリカにおける植民地の解放や、地球環境持続への配慮など、個人や国家が主導するものではなく、民の意志或いは民の意志で選ばれた人々によってより良い方向へと進んできたのです。個人においても、組織においても、そして社会においても、「自分たちのことは自分たちで決める」という基本姿勢を徹底し、なお且つ選択の権利を行使することによって、より良い未来は築かれて行くのです。安

直な判断を誘う雰囲気排除し、「凛々しい民」として、人やまちのためになろうとする規範に裏打ちされた自律した民が、未来に責任を負うあらゆる事に対し、今を生きている当事者として、現実に真正面から向かい合い、今行動へと移していかなければなりません。そのためには、まず自らを取りまく事柄を自分事として捉えてみて、その仕組みや内容、原理原則に興味や関心を持ち、感情的な世間の空気によって流されず、あらゆる立場の人たちがあらゆる立場の人の為に、自らの意志と知恵をもって考え、判断することが大切です。私たちは、「凛々しい民」の英知を結集し、より良い方向へと導く、新たな歴史を刻みます。

地域協育を推進しよう

私たちの生きるまちは、多くのひとや文化、歴史の集大成です。今の私たちが安穩と働き暮らせるのも、先人達が創り上げたこのまち、風土文化や経験によって培われた規範がベースにあるからに他なりません。私たちは、その人やまちを敬う心を持ち、共に未来を創ってこそ、新たな時代を切り開くことができるのです。人やものを敬い、それに倣って生きていくには、その人やものの背景や繋がり、文化に対して、充分に興味や知識を持って体得し、共感や感動を得なければ、その土台を築くことはできません。現在の学業は、背景を知り、情報を持つことを飛び越えて、興味や共感、感動に触れさせることなく歴史や人との関わりを記号として学び、記憶に留めさせるだけの傾向にあります。かつて商都と呼ばれた大阪のまちは、突然変異として全国各地の物産がこのまちに集中したり、商人や商店が集まったりしたのではなく、それまでにこの地に根付いた異国との交流や異文化を取り込む住民の気質が素地となり、その時代のこの国、近隣諸国とのバランスが、商都と言わしめるまちを創り上げました。まちの歴史や文化には多くの人の活動や行動、そして歴史的背景が積み重なり感情や感動による民意によって時代に沿うように変化し、今の状況となっています。そのことを私たち大人自身が、そのまま事象や単語として覚えるだけでなく、感動をもって知識とし、自身の関わるまちの背景をも共感として捉えて、次の世代に繋いでいくことこそが、このまちに生きる先人としての使命なのです。

共に築け！揺るぎない資産を

都市（まち）を構成する重要な要素として、そこには企業という必要不可欠な存在が必ずあります。「企業は社会の公器である」という松下幸之助の言葉にもあるように、それは経済活動を通じて社会を形作るパーツの一部であるということ、そして公器であるためには、経済に偏重し直接的に企業単体や個人の利を求めるだけでなく、このまちや国、この星全体を考慮して長期的に活動しなければならないことを、そこに関わる全ての人が理解する必要があります。ノーブルオブリゲーションや社会的責任が企業に問われるようになって久しいですが、未（いま）だその実態は、世間の風潮や流行りに依るところが大きく、体裁を気にしての活動となっている事例が多く見受けられます。しかし物財的な豊かさを幸せとする前時代の活動は過去のものとなり、これからの公器としての活動は、時代の流れの中で企業が存在するために仕方なく行うのではなく、企業が志の中で貢献し、誰かの役に立つことこそ理念とすべきものであり、その理念こそが企業や団体の最も大きく揺るぎない資産となり、恒久的持続につながることを理解し実践しなければなりません。さらに、理念や大義を同じくし活動する者同士が、それぞれの得意とする役割や率先して行うべき使命を全うし、力を合わせる

ことでその存在意義はより大きなものとなり、関わる全てのステークホルダーとの良好な関係が形作られる素敵な社会となります。そのために、企業や団体が互いに惹かれあう公器としての活動を展開し、恒久的な資産を創りだしていきます。

地球規模で大阪的外交を展開しよう！

まちが一人ひとりの市民によって成り立っているように、この世界も一つ一つの国によって成り立っています。同じようにこのまちやそこに住み暮らし働く人々、企業、団体にも、世界にとって必要とされる為すべきことがあります。また、人と人やまちとまち、国と国の関係は、国策や行政の推進としてのみ始められ拡がるものではなく、まずは民間の意思によって築かれていかなければなりません。一般的に民間外交というと、形式的な懇話会や意見交換に尽きてしまうケースが多く見受けられますが、本来は、各々がこの世界においての責務を果たし、そして互いに協力し合い、より大きな効果が得られる活動を共に取り組むことこそ、私たちに求められている外交なのです。地域に住み暮らし働く人々たちが経験やつながりを基に、地球規模での俯瞰的な視野や感覚をもって結束し、世界の国々の平和のためにできる事があれば、もっと積極的に活動範囲を世界へと拡げて展開する必要があります。私たちはこのまちだけの姿をみるのではなく、地球全体の中に存在しているという事を念頭に置いて、平和に対して何ができるのかをしっかりと見据え、世界における大阪としての活動を積極的に展開していきます。

果敢に！JCⅠ大阪プレゼンスを！

戦後、この国は急速に個人の利己的な成果主義が進み、生活単位コミュニティの中で自己の確立や責任を伴った主体的判断ができなくなり、他者依存や先送り体質となる傾向があります。JCⅠ大阪に60年以上続くそこに根付いた文化や英知の集積、活動の数々は、その時代の社会に必要とされる事から始まりました。組織があるから運動や事業があるのではなく、現在の社会に、そして次の世代に必要であり、自分がすべきこととして立ち上がる若者たちがいたからこそ持続的な活動となり、歴史として培われてきたのです。「二階に昇りたい、何とかして昇りたい、二階に昇ることが唯一の目的だ、と熱意のある人はハシゴを考える。」私たちは、時間と世界との繋がりを体感し、目的をしっかりと見据えて新たな指針を打ち立てた今、運動が本来の姿と合致しているか、目的に向かっているか、地に足がついているかを逐次確認し、その実現のために熱意をもって歩んでいく必要があります。組織で培った経験則を生かして、より良い大きな変化を社会に起こすために、私たち単独の活動のみならず、あらゆる団体との共催や賛助も含め、積極果敢に取り組むべきです。そして多くの人や団体の一部として活動を行うことで、JCⅠ大阪プレゼンスともいえるべき圧倒的な存在感をもって、あらゆる方面からの評価や賛助を実直に受け止め、進化し続けることを伝統として、更なる飛躍をしていかなければなりません。歴史は振り返り学ぶだけではなく、自らの意志で活動した証として積み重ねて、輝く確かな未来に繋いでいくためものです。そして昔も今も変わらずJCⅠ大阪は、あらゆる価値の根源であり、変革の能動者の先頭となって、このまちにその名を刻んでいきます。

この世に生まれ、この世のために凛々しく生きた証をこの大阪に刻み込む。
全ては光輝く未来のために。